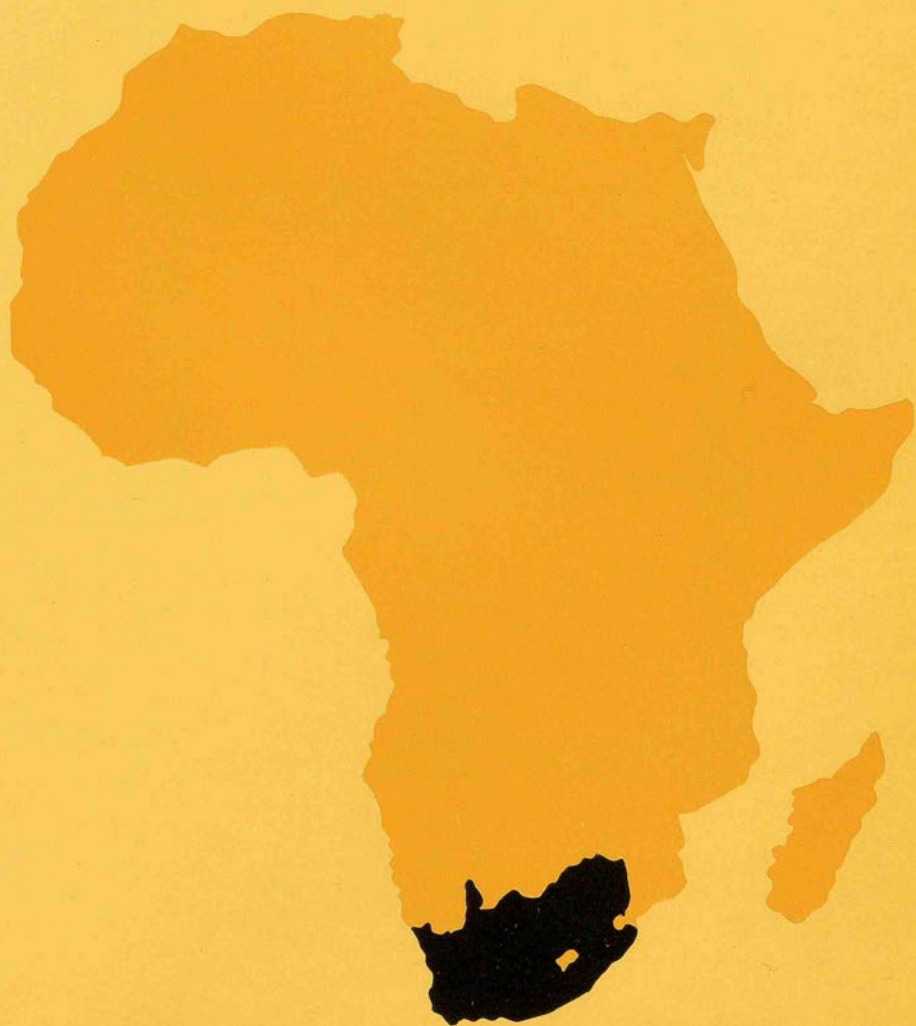




国 連

南アフリカ史の政治学



国際連合広報センター



国 連

南アフリカ史の政治学

この論文はコネチカット大学のバーナード・マグベーン教授（人類学）が執筆したもので，国連反アパルトヘイト特別委員会の要請のもとに出版された。

ここに表明された見解は，すべて筆者のものである。

はじめに

もし歴史を科学的なもの、あるいは人類の行動を正確かつ誠実に記録するが故に国家の未来を測る尺度や道しるべとして利用できるものとするならば、その研究や解釈にはある種の倫理基準がなければならない。

他方、もしわれわれの娯楽酔狂のために、また国家エゴをあおりたて、不遜にも一種心地よい満足感を味わうために歴史を利用しようとするならば、科学として、もしくは科学の成果を利用する芸術としての歴史という考えを捨て、新しい世代に思い通りに影響を与え、かつ教育するため、ただ歴史的事実の一断面を利用しているだけということ率直に認めねばならない。

W. E. デュボア

第2次世界大戦直後の世界に植民地解放運動の波が吹き荒れたとき、いずこの白人入植者たちも深刻なジレンマに直面しなければならなかった。つまりそれは、征服によって得た土地、軍事的、政治的かつ経済的威圧によって維持してきた土地に対し、自分たちはいかなる権利を有する、という自問である。そして1948年以来、南アフリカの歴史は、アフリカの民族主義が求める政治的主張に対抗するイデオロギー闘争の手段として書かれるようになった。

この南アフリカ史の“新版”は、二つの目的をもっていた。第一に、現世代のボーア人の祖先は、17世紀にはすでに皮ふの色を厳しく区別していたことを証明することである。つまりアパルトヘイト（人種隔離政策）の精神は、既に300年前からあった考え方を再主張するものにすぎないということである。第二に、いわゆるバンツール族は、白人と同時に南

アフリカに来たのであり、南アフリカに定住するようになったのは18世紀に入ってからであると証明することである。これは何を意味するかといえば、ボーア人とイギリス人がアフリカ人社会に対して起こした19世紀の戦争は、強奪と略奪の植民地戦争ではなく、空白の土地の所有をめぐって敵対する征服者同士の戦争であったとすることである。現在の居留地（今日ではホームランド＝母国と命名されている）は、アフリカの原住民社会の本来の母国であったというのだ。

個人、国家を問わず、そうした現実の大きな歪曲は、慎重に検証してみなければならない。それは、国家神経症の極端なケースの例である。もちろん、現在の支配者たちや彼らを支えている思想に対して、歴史的記録、とくにアフリカ人民に加えた数々の不正を見直すよう期待しても無理である。こじつけた歴史的論理に従って、アフリカ人はいろいろな名前で呼ばれてきた。ある時は「カフイール（Kaffirs）」と呼ばれたが、それは無宗教者を意味する。ついでこの不自然な蔑称が落とされると、アフリカ人は単に「原住民」と呼ばれるようになった。これはその土地の動物や植物と同じ存在として分類するために使われた。その後「原住民」という言葉が別の意味、すなわちその土地の先住民という意味をも持つことが認識されると、「人々」という意味をもつ「バンツー」という言葉が使われるようになった。最近バンツーという言葉も使われなくなっており、「バンツー行政局」は今や「多人種関係局」と呼ばれ、南アフリカ自身も「多人種民主主義」と呼ばれている。支配者は政治的意味あいから「アフリカ人」という言葉を避けている。

アフリカ人を南アフリカ国民として認めないために生じた政治的影響は、驚くべきものである。それは想像を絶する悲劇と苦難の原因となってきた。歪められたアペルトヘイトの論理を進めるために、都市で一生過ごすアフリカ人でも、「移動労働者」（guest workers）もしくは一時滞在者と呼ばれる。このような言葉の本当の意味は、アフリカ人は自国において政治的、社会的及びその他の諸権利を要求することができない

ということである。彼らが骨を折って建設した南アフリカの都市における彼らの存在価値は、白人のトムとかディック、ハリーやジェーンの意のままに動く機械であることだけである。政治的権利を主張しようとするなら、可能なのは「元々の」ホームランドだけである。彼らが自分たちをアフリカ人と呼ぶと、邪悪な動機に満ちた途方もない要求を行っていると言われる。したがって南アフリカのアフリカ人にとって、ナショナリズムについて語ることはできずに、ただコサ族のナショナリズムとか、ソート族、ズールー族、ツワナ族、その他のナショナリズムについて語るほかないのである。

しかし、アフリカ人の知的エリートやより一般的に都市のアフリカ人についてはどうであろうか。アパルトヘイト制度の考案者の一人、エイゼレン博士によると、教育を受けた都市のアフリカ人は例外である。彼らは「進歩した人々の階級」で、バンツ族の忠義を放棄し、新しい包括的な「アフリカ人」の共同体を建設しようと主張する。それは性格的にはもはや南アフリカではなく、全大陸がその遺産であると主張する。このグループは、アフリカの他の多くの地域の原住民と同じように「アフリカ」という名を使ってはいるが、彼らの求めるような計画を受け入れる余地は南アフリカの政策の中にはないことが明らかである。次いでエイゼレン博士は、都市のアフリカ人を「どこにも所属しないバンツ族個人の集団」と呼んだ。いかなる伝統的権威、もしくは法の強制力にも束縛されることなく都市に住む独立したバンツ族個人の集団をもつ現在の制度は、まったく失敗であることが明らかとなった。

ピエナール (Pienaar) と同様にエイゼレンは、アフリカのナショナリズムの歴史的発展とアフリカの知的エリートの役割を偽って伝える知的遊戯にふけている。国民党政府は神話を発明し、アフリカ人のための政治的処方箋に従わないすべてのアフリカ人組織を抑圧してきた。

アフリカ人の現在の世代の問いに答えるために、南アフリカ史についてどのような問題を研究しなければならないか。恐らくもっとも重要で

ある一つの問題は、南アフリカに見られる黒人と白人との間の支配と従属の特殊な関係がいかにして存在するようになったかである。第二に、アフリカ人民の征服にボーア人とイギリス人がそれぞれどのような役割を果たしたのか。第三に、いかにしてこの関係の全制度およびそこから生じた態度を廃止もしくは変更することができるか。最後に、何が解放を妨げる基本的問題であり、南アフリカ解放運動はいかにしてその問題を解決できるか。アフリカ人の闘争は、特殊な過去から発展した特殊な矛盾を解決するための闘争である。

これらの疑問に答えるには、ヨーロッパ人の征服に先立つアフリカ人社会の性格と構造とについて簡単に説明することが必要である。また、アフリカ人社会を強制的に支配するヨーロッパ人社会や、彼らが利用した方法についても研究する必要がある。南アフリカの経済、社会、政治の機構は、異なるレベルの社会発展にある人々の闘争を通して形成された。このアフリカ人、ボーア人、イギリス人の社会構造について簡単に説明したい。また、その長期的かつ累積的な効果によって生じた現在の状況の各種側面についても取り上げてみたい。

社会の性格

社会というものは、物理的な世界に根ざしている。従ってその社会を見れば、年月をかけてつくられた様々な集団が環境と相互に作用し合いながら、その状況のもつ限界と資源の範囲の中で発展、再生してきた過程が包括的にわかる。人間は自然界の中で行動し、また物理的な環境の作用を受ける。その過程の中で、ある集団が環境と「調和」できるような形態の社会制度が発展する。人間の働く能力とその仕事をやり遂げるために作る手段が、人類の発展を示す主要な特徴を形成する。

しかし、人間の行動はまた、目的をもった行動でもあり、到達すべきゴールをもっている。したがって、社会の経済構造は、社会的存在の物質的状态を表現、説明、合理化、合法化することに役立つ考えや制度、慣習など、上部構造に反映される。

白人の歴史家やその他の著述家は一般に、ヨーロッパ人が植民地化する前には南アフリカに固有の文化や文明がなかったようなふりをする。今世紀初めにケープ植民地政府の史料部研究員であったG. M. ティール（G. M. Theal）は、南東バンツ族のエングニ（Nguni）族が「ザンベジ川を横断したのはわずか300年ちょっと前のことであることが知られており」、バンツ族、その他の部族が「彼らよりも相当前にやってきたことはありえない」と主張した。

ケープ半島にコイコン族（Khoikhoen）とサン族（San）の存在は認められたものの、神秘に包まれている。とくにサン族は、人間（白人）と類人猿（黒人）とを結びつける歴史的な生き残りでないにしても、進化上の謎とされている。スマッツ将軍は、進化の段階に関する科学的見解と呼ぶものを論じた際に、ブッシュマンは「ある原始時代からたまたま生き残ったオーストラリア原住民のように、人類学上の発展で進歩をはばまれたタイプを代表するものである」と述べた。さらに続けて、「われわれは決してこの小さな進化論的遺産に同等の地位を与えること

はしない」と述べた。

長い間、アフリカ人社会は歴史を持たないと考えられ、人類学的方法で研究されてきた。真の歴史はヨーロッパ人の到着で始まったと見なされている。しかし、歴史的証拠を詳しく調べてみると、この神話は正しくないことがわかる。15世紀にさかのぼって、ポルトガル人が書き残した多くの重要文書がティールによって集められ、翻訳出版されてきたが、すべての文書は、南アフリカの南東海岸沿いにアフリカ人社会が存在していたことを示している。また、中世の南アフリカ、東アフリカの多くの地域に定住者が住み、加工品を使用していたことについて人類学的調査が行われ、その結果も刊行されている。この人類学的証拠は、ヨーロッパ人の到着以前にかなりの技術的、社会的、政治的業績をもったバンツ語圏に属する人々の文化が南部アフリカに存在していたことをはっきり示している。9世紀にはすでに、比較的安定した形態のアフリカ人（バンツ語を話す）社会が存在していた。その住民が現在この地に住む人々の祖先であった。彼らの政治的、経済的發展段階は違っていたが、家畜の飼育や農業に加え、金属の採鉱、金属用品の製造、十分な規模をもつ取引などを行っていた。オクスフォード南アフリカ史第1巻へ寄稿した論文の中で、R. R. インスキープ（R. R. Inskeep）は人類学的証拠として次のような要約を行った。

「ずっと前の歴史的証拠によると、バンツ語を話す人々が南アフリカの東側に入植し、16世紀か、あるいはその以前までには南のトランスカイまでその居住地を広げていたことを示していたと言えるかも知れない。トランスバルからの最新の放射性炭素による年代調査によると、11世紀までには鉄器時代（ほぼ間違いなくバンツ語族とみられる）は、北部まで広がっていたことを示している。組織的な研究が欠如していることから、証拠の解釈に危険が伴うが、もっとも古い文化の一つウイトコムスト文化（Uitkomst）はソト族（Sotho）中の集団祖先によるものであると

考えられ。他方、一層根拠は弱いが、エングニ族をトランスバール地方とオレンジ自由国で石の村を建設した人々の子孫であると見ることができるかも知れない。トランスバール地方とオレンジ自由国に見られる遺跡の複雑さと豊富さは、採鉱や金属加工の技術のかんりの証拠とともに、活気にあふれ、よく組織された共同体が存在したことを示している。われわれが現在、今日存在するバンツ語族の先史時代についてより正確に話すことができないのは、記述が大よそ実現しそうにないからではなく、まだ十分な研究が行われていないからである」

考古学的証拠について詳細に調べることがこの論文の目的ではない。ここでは、すでに始まった考古学的、歴史学的研究を今後も続けてゆくことが緊急に必要であるということにとどめておきたい。徹底的かつ組織的な考古学調査を南部アフリカ一帯で行うことが必要である。中近東や西欧の図書館にある資料を徹底的に調べ、南アフリカと世界の他の地域との交流の証拠を探すことも必要である。

そうした大規模な科学的、歴史的研究に必要な資料を得るには、将来の南アフリカ人の政府の樹立を待たなければならない。しかし、その間、歴史的事実の再発見に関心をもつ民間の機関や国際機関は、そうした調査の基礎がためを始めることはできる。

16, 17世紀におけるアフリカ人社会

1652年にオランダ人が喜望峰岬に食糧積み込み中継地を建設したが、16, 17世紀の南アフリカに住むアフリカ人は、食糧の生産様式によって分類することができる。サン族は、人類学者が高等狩猟民（Higher Hunters）と呼ぶ種族に属する。彼らは集団を作り、食糧を得るために狩猟を行った。彼らは弓矢を使用していたことから初期狩猟民（Lower Hunters）と区別される。サン族の経済活動は、巨大な知識の宝庫を生み出した。生活していくうちに、彼らは植物や動物の性格についてそのすべての種について知識を得た。植物についての知識のほとんどは、女子を通して得られた。というのは、果物やイチゴを集めるのは女子の仕事であったからである。他方、男子は狩猟する動物の習慣についてよく知っていた。サン族の男性は、獲物を殺すため毒矢を使っていた。その結果、毒や解毒剤の知識を十分に身につけた。

サン族はほら穴に住んでいた。冬の間、狩りに出かけない時は、ほら穴の壁に絵をかいた。その壁画のいくつかは現在も保存されており、彼らがきわめて豊かな芸術的才能をもっていたことを示している。

白人入植者に対するサン族の生存のための闘争は、ちょっとした戦争や各地でのこぜりあいなどの形で、2世紀にわたって続けられた。サン族の大多数は次第に絶滅してゆき、やっと生きのびることのできた人々はカラハリ砂漠へと追いやられた。今日生存しているサン族の社会は、進歩をはばまれ、遅らせられた結果である。彼らは進化上の変異ではない。

ケープ半島を占領したコイコイ族は、遊牧生活の段階に達していた。狩猟や漁業に加え、彼らは家畜を飼っていた。コイコイ族の主な経済活動は、尻尾の太い羊や牛の群れの飼育から成り立っていた。ミルクは彼らの安定した食糧で、男性は牛乳だけを飲み、女性や子供は雌羊の乳を飲んだ。コイコイ族の家畜はヤン・ファン・リーベックやその部下たち

に羨望をもってみられ、また彼らの苦難の原因となった。ファン・リーベックは1652年12月13日の日記にコイコイ族の家畜について次のようにのべている。

「今日、ホッテントットは何千頭という牛や羊をつれてわれわれのとりでまでやってきた。そのため、彼らの牛とわれわれの牛とがほとんど交り合ってしまった。立派な牛が沢山いるのに、ちょっとした数も手に入れられないというのではやりきれない。もし許可があれば、彼らから1万頭ほど奪う機会があった。命令さえあれば、いつでも手に入れることができ、それも今ならうまくやれる。というのは、彼らはわれわれを非常に信頼しているからだ。部下の150人もいれば、こちらの損害はゼロで黒牛1万から1万1,000頭を手に入れることができよう。彼らはいつも武器を持たずにわれわれの所にやってくるので、インドへ奴隷として送る連中を抵抗されることなく捕えることもできるであろう」

1,2日後、ファン・リーベックは、合わせ持った海賊魂と敬虔さとをそうした高貴な動物を異教徒に所有させておく神の施しに疑問を持った。程なく、彼は神の行いに疑問を持つよりはその意向に逆らうことが最善であると考えようになった。

コイコイ族は土地については共有財産とする態度をもっていた。土地の所有に対するオランダ入植者とコイコイ族との対立は、ファン・リーベックの日記に非常にはっきりと書かれている。ファン・リーベックは、カアープマン（Kaapmans）またはケープ人の酋長や大君主との会合について書いている。オランダ人は時々コイコイ族をそのように呼んでいた。ファン・リーベックの日記によると、彼らはオランダ人の活動について苦情を述べるためにやってきた。

「(彼らは)世の初めから彼らのものであり、家畜を放牧してきた土地をわれわれがますます多く奪っていると強く主張した。かりに彼らがオランダへ行って同じことをした場合、それが認めら

れるのかと問い、さらに次のように述べた。あなた方がこのとりでに滞在することは大した影響はないが、あなた方はわれわれがどう思い、どんなに不快に思っているか考えてみることなく奥地へ入り、最善の土地を選んでいる」

ファン・リーベックは、カアープマンの主張を拒否する理由を次のように報告している。

「彼らは、そこに沢山生えている野性のアーモンドの実を採り、冬の食糧となるその根を掘ることを少なくとも認めてほしいと主張した。それは許されなかった。というのは、そうすると入植者に危害を与える機会が多くなりすぎ、また、計画中の保護用生け垣、もしくは防衛用障害物を植えるため、われわれ自身今年アーモンドを必要とするからである。こうした理由はもちろん彼らには言わなかった。しかし、彼らはその要求を頑強に言い張るので、われわれとしては最後に次のように答えざるをえなかった。

すなわち、われわれに対する戦争の結果、彼らは土地を失ったのであり、土地はもはや彼らのものでないことを認めなければならない。それ以上に、いわば剣によって勝利を収めた防衛戦で、われわれから不法に奪った家畜を盗まれたからといって取り返すことはできない。われわれもこちらでそれを飼う考えだからだ」

ファン・リーベックにとっては、どんなごまかしの手を使っても、使い過ぎるということとはなかった。ある時の日記には彼の犠牲者を偽善的に非難した後、次のように書いている。

「これに対して彼らは痛烈に苦情を述べ、この国に入植した連中は時には羊や牛を盗み、自分たちの耳や腕からビーズや腕輪を奪い取っては連中の奴隷にやり、指揮官の知らないうちに自分たちをなぐり、打ち、大きな災いを与えてきたと述べた——確かに彼らの言い分には当たっているところがある。こうした状態にこれ以上耐えることができなくなった彼らは家畜を盗んでその復讐を

することに決め、自分たちにはそうする理由が十分にあると大いに宣言した。これに答えて、そうした妨害をした人々に対するわれわれの見せしめの処罰を彼らに思い出させた。もし彼らがそれに満足せず、彼らが言ったような略奪や盗みの手段に訴えて復讐することを選ぶなら、われわれの間には平和はありえないであろう。そして、征服者の権利として、彼らがわれわれを追い払うことができないかぎり、われわれはより一層の土地を彼らから取り上げるであろう。そうした場合、同じ権利によって、彼らがとりでの所有者となり、またそれは維持できるかぎり、すべての物が所有者のものとして残るであろう。この代替案が彼らに都合がいいのなら、どのような行動をとるべきか分かるであろう」

われわれがファン・リーベックの日記を長々と引用したのは、当初から黒人、白人の関係を導いてきた態度をそれが如実に示しているからである。オランダ人によるそうした挑発が、コイコイ族の抵抗を生み出したのであった。1659年にはすでに、コイコイ族は彼らの土地の略奪に対する一連の「解放」戦争となるものを始めていたが、すべてが無益であった。やがてコイコイ族は内陸部へと追いやられ、他はオランダの支配の下に従属の状態におかれた。強制労働、不当な納品義務、天然痘などすべてが多くの犠牲者を出す原因となった。

豊かな土地と多くの家畜とを奪われたコイコイ族は、窮乏に追いやられていった。18世紀の末から19世紀の初めにかけてケープ州を訪問したジョン・バロウ卿は、次のように書いている。

「実際、広大なグラーフ・レイネット地区には、独立したホットントットの遊牧民の群れは全然見あたらなかった。また、オランダ人に仕えていない人もほとんど見られなかった。こうした弱い人々、もっとも無力な人々、そして現状では人類のもっとも悲惨な人々は、自分たちの財産や国、自由についてだまされ、奴隷の方がまだ幸せというような状態を自分たちの哀れな子孫にまで残

してきた。それははるかにはなれた子孫にまで続くとは思わない……状態である。同じホッテントット族は忘れられ、さもなければほとんど注目されないか、または死滅した人々としてしか思い出されないであろう」

ロンドン伝道協会(London Missionary Society)のバストン牧師はコイコイ族はオランダ人のなすがままにあり、「もっとも過酷な労働、あらゆる種類のいやがらせ、あらゆる種類の忌まわしい処罰を受けている」と観察した。「そして、悲惨な境遇にあって彼らの数は減少し、人々は矮小になり、その心はうちひしがれ、奴隷でさえも彼らを自分より下等かつ劣等な人間以下の労働者として見下した。」

ファン・リーベックがコイコイ族の処遇についてジャングルの掟を適用しようとする傾向は、驚くに値しない。オランダ人入植者は、数知れない戦争を通して鍛えられた開発途上の資本主義国家から来た人々であった。18、19世紀におけるヨーロッパ文化の下では、いかにひどいものであろうと、富を得るためにはいかなる手段も許された。さきにふれたバロウの旅行記をさらに引用すると、オランダ人の残虐性は次のように証明されている。

「植民地の辺境に住むオランダ人農夫が使っているホッテントットに与える残忍な処罰は、西インド諸島の奴隷に対してさえも行われなようなものである。海牛やサイの皮ひもによるむち打ちや痛打は、まだ優しい処罰である。もっともシャンボーと呼ばれるこうしたむちは堅くしなやかで、しかも鉛のように重く、もっとも恐ろしい道具である。ホッテントットのすねやももに小さな弾丸を打ちこむことは、カントーズ川の周辺に住む人々にはよく知られた処罰であった。激怒のあまりこれらの哀れな人々を殺害してしまうこともあったが、農夫の関心を引くことはほとんどなかった。というのは、彼らはあらゆる点で奴隷ではあったが、譲渡可能な財産ではなかったからである。こうした状況のもとに、

彼らの命は農夫からあまり価値あるものと見なされず、その処罰も残忍なものにしている」

2,3年後には、ケープ植民地近くの原住民人口はあまりにも少なくなり、奪う家畜もなくなったので、さらに奥地に向かって「戦う」探検隊が編成された。ボーア人（これはオランダ人移住者が使っていた名前で、農夫を意味する）が、北部および北東部へ進むにつれて、彼らの活動は明らかに強奪と集団虐殺と定義付けられるようになった。それから逃れたとしても、奴隷、監禁、生活習慣の抑圧がその代償であった。彼らが生き残る唯一の機会は、今や土地と家畜を所有する人々のために卑しい仕事をするのであった。旅行家のダンピエール（Dampier）は、かつては独立の民であったこの種族について次のように書いている。

「オランダ人町の近くに住むホッテントットは、その最大の生計をオランダ人から得ている。というのは、オランダ人の家には常に1人またはそれ以上の人が働いているからである。彼らはあらゆる種類の奴隷の仕事をする。彼らともっとも近い関係をもつ3,4人の人々はオランダ人の家のドアのそばや近くに座り、食卓から投げられる残飯を待っている」

コイコイ族の貧困は、ボーア人の略奪、蹂りん、不正利得の政策の結果である。ボーア人の支配下におかれた数えきれないほどのコイコイ族は、徹底的に搾取された。人や土地による財産、強制労働と結びついた人間から働く動物への変形、こうしたことが彼らの経済の基盤であった。オランダ人入植者が持ち込んだ天然痘、その他の病気もコイコイ族の高い死亡率の原因ではあったが、コイコイ族の社会を滅亡させたのは、究極的には社会的、経済的災害であって、生物学的なものではなかった。

エンゲニ族やソト族（Sotho）は、より高度の遊牧民の段階に達していた。家畜の飼育と農業が彼らの生活様式であった。エンゲニ族やソト族は手工芸、定住、冶金ではさらに進歩していた。部族の孤立や排他性はなかった。

この分類は言うまでもなく抽象的なものである。それは、人間の集団が通過する進化の過程を示しているだけである。各種の段階は互いに関連し合っている。狩猟や食糧の収集さえも遊牧民や農耕民によって行われていたが、重要性は小さくなっていた。同じくこれらの分類は固定した、不変の年代の一段階を構成するものではない。食糧を集め、狩猟を行うことはいずれにおいても初期の段階で行われた。しかし、遊牧や農業の段階は、その環境の要素に大きく依存している。

重要なことは、帝国主義的な弁明者が行った通俗的な偏見とは対比的に、16、17世紀のアフリカ人社会は発展段階が異なっていたことである。南アフリカの黒人は野蛮な過去しか持っていなかったと言うことは、単に間違いであるばかりでなく、悪意のあるものである。証拠によると、原住民の人口、経済、政治の成長に関係した活気ある社会が存在していた。それは狩猟や食糧の収集に加え、家畜の飼育や農業、金属の採鉱や金属細工物の製造などを行っていた社会を示している。こうした社会のいくつかは中央の権威をもっていなかったが、他の社会はよく権力の確立した、有能な支配者をもっていた。

白人移住者

1600年から1900年までの3世紀の間に、ヨーロッパ社会はアジア、米州、アフリカへと進出した。封建制度が崩壊し、商業主義時代が到来したことで資本主義産業革命が起きたことがその触媒の働きをした。海外に植民地を建設したヨーロッパ社会の考察は、1652年から現在までの南アフリカでの事態の推移を理解しようとする場合、特に重要な事項である。植民地体制が本国の権力の善悪を誇張して具体化したものだとして主張したのは、他ならぬアダム・スミスであった。南アフリカにおいて、オランダ、後には英国の植民地開拓者がそれぞれの本国の政治経済的な構造上の欠陥を大規模に再現した。

西欧化の過程で、社会的、経済的發展段階が異なり、言語や文化、生産様式も異なった何百万もの人々が強制的に統合された。植民地主義自体が古くからの歴史をもつ一方、1652年のオランダ人たち、及び1814年のイギリス人たちによる植民地主義は、資本主義の生産様式が生まれ、成熟していったことに密接にかかわっている。

商業主義と産業革命の結果、ヨーロッパ人は他民族を支配し、搾取する力となる驚くべき技術を発達させた。白人移住者の必要と利益本位にかなうようなアフリカ社会につくり変える土台となったものは強力な軍事力であった。

1652年にケープで保養基地を建設したオランダ人は、封建制度の沈滞した景気を打ち破った結果の典型的産物であった。ケープ基地の設立が政府の決定によるものでなく、17人の裕福な商人の管理によるオランダ東インド会社（VOA）という貿易会社の決定によるものだったということは大きな意味を持つ。オランダ東インド会社の唯一の目的は東洋のいまだ知られざる品物や富を手に入れることであった。同会社の派遣社員らは自分たちの目的を達成するためには手段を選ばず、どんな悪事も犯した。VOAの従業員はオランダ社会でも向こう見ずの連中として知

られる人達の中から選ばれた。従業員の一は1732年に事業に参加した時こう書いている。「兵士あるいは船員として会社の条件に従って徴用された者は概してみすばらしく、また実際に貧しかった。」応募者の多くは懲罰として海外に送られた。会社の従業員たちは必要な物資を手に入れるため、現地を支配する手段を講じ、コイコイ族はこれらのオランダ人の冒険好きの良いかもとなった。

英国人は1806年に初めてケープ港を占領したが、永久所有を始めたのは1814年になってからであった。19世紀全般に渡り、南アフリカ事情の動きに何らかの形で関与していたのは英国人であった。大砲の発達と大砲の搭載可能な帆船の進歩をもとに彼らは飛躍的な海軍力を獲得し、その力で南アフリカの部族集団や王国の土地を併合していった。

1820年、4,000人余りの英国人移住者は、ケープ植民地の東部にあるアルバニー地方に到着した。これら永久移住民の到着によって、英国とアフリカ社会の間に人類の歴史上他に例をみない争いが始まった。本国の陸軍、海軍の支援を得た英国人移住者は、アフリカ人を植民地支配下に置こうとして異様な決意で戦いに臨んだ。移住地の労働需要を超過したと考えられる人々はますます内陸部へ追いやられた。百年間に渡る南アフリカでの英国人移住者の活動期間中、黒人と白人の境界線は常に北、東へと移っていった。人類学者のモニカ・ウィルソン教授はこう書いている。

「1772年、コイコイ族と混じったコーサ族(Xhosa)の一部はガムトゥース川(Gamtoos)に住んでいた。1806年境界線はフィッシュ川(Fish)に移り、1811年にエンドランベ(Ndlambe)は2万人の部族を引き連れてフィッシュ川の対岸へ押しやられた。1819年、フィッシュ川とケイスカンマ川(Keiskamma)の中間地帯は中立と宣言されたが、1824年までにその一部は白人に占領された。1847年に境界線はケイ川(Kei)まで延び、1858年にはエンバシェ川(Mbashe)まで、さらに1878年にはエンササ

川(Mthatha), 1894年にエンササ川とエンタンブナ川(Mtamvuna)の間にあるポンドラント地方が併合された」

オランダ人と英国人移住者がアフリカ社会に与えた影響を考察する際、ずっと長続きする本物の影響と、表面的なものとを注意深く区分しなければならない。18世紀、旅回りドロのボーア人（オランダ人移住民は現在こう呼ばれているが）は、内陸への征服を求めてではなく、むしろ略奪品を求めて冒険をいどんだ。彼らは混血やコイコイ族から徴兵した兵力をあてにしていたが、これらの兵士はしばしば、実戦要員として前もって前戦へ送り込まれていたが、折に触れては、脱走してコーサ族側に加わり、逆に共通の敵たるボーア人たちに抵抗した。このためボーア人の影響は、残酷な形ではあったものの表面的なものでしかなかった。

1814年にケープ植民地を永久的な英国植民地化したことにより、一方では南アフリカの人々（アフリカ人とボーア人）の生活には社会経済上の重要な変化がもたらされた。オランダの略奪移住民はアフリカの王国を征服する軍勢力はもっていなかったが、英国人移民は、そのすぐれた軍隊と社会組織、それに（資本主義産業経済の証しである）様々な資質の故に、資本主義路線に沿い、自分たちの世界経済推進の補助道具として同国を再構成する道を取り始めることができた。コーサ族との戦いごとに英国は余剰住民を追い出し、国土を英国移民で分割して、残ったアフリカ人住民を賃金労働者につくり変えていった。19世紀の南アフリカの歴史は、英国植民者によって一步、また一步と内陸部への進出の繰り返しであり、その度ごとにアフリカ人の部族長統治国と王国は奪取され、征服されて大英帝国の支配下におかれていった。

1835年、1847年及び1851年に起こったいわゆる「カフィール戦争」で、英国はコーサ族に対し組織的な侵略を行って土地や家畜を没収して、その力を奪っていった。

これらの戦争は民族の絶滅策ではなく、それはアフリカ人から独立生計のあらゆる手段を奪おうとする焦土戦術であった。歴史家コリーによ

ると、コーサ人を完全な従属民族とする唯一真に実効のある道は、「小屋や部落を焼き、家畜を追い払い、トゥモロコンやその他の食物を壊滅させること、つまり国土を荒廃させることだ」と英国人は決めたのだという。無慈悲な戦術の結果は、ティール博士の大胆かつ実際的なこの時代の歴史のページに歴然と描かれている。1851年から1856年の作戦中、「森やジャングルはあさり歩かれ、家畜1頭残らずあさられた」と述べている。1851年12月、二つの縦隊はグカレカ州にあるクレリー王（Krelie）の本部へ向かった。その目的は、一つには反逆者の補給源を奪い取り、また一つにはクレリー王に思い知らせることだった。従ってクレリー州では掃討作戦のために穀物と部落に大きな損害を出した。グカレカ王国に対する英国の闘争を指揮したサマセット将軍が、キングウィリアムズタウンへ引き揚げてきたとき、3万頭の牛と少数の馬と1万4,000頭のヤギを連れてきた。第二の部隊は家畜7,000頭を連れて帰った。フィンゴ族（侵略英国軍を支持した土地を失ったアフリカ人）は、グカレカ族から奪った1万5,000頭の牛を持ち帰ったが、英国人たちはフィンゴ族の忠誠をつなぎとめておくために、この牛の私有を認めた。1851年の冬の戦いは、クレリーの本拠地を焼き、さらに1万頭の牛を捕えることから本格的に開始された。

グカレカ族の生活手段を攻撃する方法は最も効を奏した。悲惨な逃亡者や貧窮者たちは英国支配に服従するほかなかった。キングウィリアムズタウン・ガゼット紙は1856年8月14日、コーサ族の生活手段を破壊した結果について次のように書いた。「民族の特質と関連づけて我々が観察したことは、痩せて腹をすかせた人は常におとなしく礼儀正しいが、十分食べている人は口先がうまく、厚かましく、簡単に悪事に誘われる人々だということだ。」

白人農場にいる、南アフリカのいわゆる「無断居住者」たちは、先祖伝来の土地に実際には邪魔はされないものの、法的な安全の裏付けもなく居ついたという流民の中の典型的な残存者たちである。

英国人は、これらの戦争の過程で、政治経済的变化を導入したが、その結果無産労働階級としてのアフリカ人の統合が始まった。

英国占領下となったケープ植民地に派遣された総督と本国植民本部との間の通信を注意深く読むと、英国の戦略が読みとれる。

1846年、当時植民地本部長官であったアール・グレーは前線からの通信を読んで次のように結論している。

「入植者たちに劣らず、文明の恩恵を知らない隣人の本当の福祉を考えると、カフィール族が長年に渡り享受し、悪用した独立はもはや許されるべきではない。我々の忍耐力を彼等は明らかに認識することができなかったが、彼らは我々と締結した条約に定められた義務の遂行に無頓着であり、若い兵士の貧欲さや暴行が権力や法律の行使を控えておくにはあまりにもひどくなりすぎた。挑発もされないのに彼らの周りから攻撃してきたことで生じた現在の敵対状況に終止符を打つにあたり、もしわれわれがこれまでの戦争を終結させた時と同じような講和条件に満足するならば、彼らとの関係が将来はこれまでの繰り返しとは違ったものになると期待するには、合理的な根拠に欠けるというものだ。従って、状況にふさわしいもっと厳密かつ慎重に編み出した政策が適用されることが不可欠である」

アール・グレーによって考案された「新」政策によると、英国の優位がカフィールランドと呼ばれる領域内でも築かれるべきであり、首長やその配下の人民は英国の王を彼等の「保護者」と認め、領地内に民事、軍事の両面で首長が服従する英国の将校を駐在させ、そしてまた英国の権威は最高であり、どのような場合にも絶対服従であるとした。アフリカ人によって負わされた、植民者の「損害」のすべてに対し、賠償が厳正に行なわれるか、カフラリア総司令官と呼ばれるようになる駐在将校により刑罰に処されることになった。歴史家コリーは次のように述べている。

「アール・グレーは正義や人間性のみならず、もしできることならば、カフィール族の積極的な同意と心からの協力を得るような方法を基調とした法と行政制度に目をつけた。この協力は彼らの間に宗教的知識を広めることや、精神的指導並びに文化的な生活の術を伝授することと結びつけて獲得、維持されるものだった」

このような政策を実行に移すために送り込まれたのはハリー・スミス卿である。彼は1847年にケープ植民地の総督となった。ハリー・スミス卿は総督になる以前、南アフリカで何年も過ごしていた。彼は「オランダ人や英国人の植民者をよく知り、かつ愛しており、シクの勝利から戻ったばかりの第一級の兵士『アリワルの英雄』であり、いつも活力と善意に燃えている。彼は突然現われ、急に評判を広め、12カ月間の息をもつかぬ間に全ての南アフリカは彼の意のままになった。」

国境問題を処理するに当たり、ハリー・スミス卿は1948年1月7日、キングウィリアムズタウンで大会議を開くよう命じた。これに集まった首長をはじめ、側近や、何千人もの部下たちは、征服により彼等が今建築を許可されている土地は取り上げられており、彼らの政治的独立は終わり、以後条約が結ばれることはなく、将来最高君主は、インコシ・インクル（Inkosi Inkulu = 彼自身または彼の後継者）と告げられた。「クレリーは終わった」と彼は大声で叫んだ。「サンディリも終わり、ウムハラも終わった。聞け、私が諸君のインコシ・インクルだ。」彼は自らの手に飾りつきの棒をもち、それを「執権棒」と名づけた。各々の首長は前に出て、その棒に触れながら、宣誓しなければならなかった。

コーサ族への英国の圧力は口に出せぬ人間的屈辱と苦悩をもたらした。1856年から1857年にかけて、悲劇的な家畜殺しがセンプ族で起こった。宣教師に勇気づけられたセンプ族は、侵入者への憎悪から自由になるうとして自分達の家畜の大量虐殺を行った。つまり自らの主要な経済的基盤を奪ったのである。英国植民地カフラリアでは、およそ20万の家畜が殺され、2万5,000人——主に女性、子供と老人——が、憎い敵に対す

る魔よけの犠牲となった。概算によると、英国植民地カフラリアのアフリカ人人口は、20万人から3万7,000人に減ったと言われる。アフリカ人の自滅行為は、1854年に到着した最初の民間総督であり、高等弁務官でもあるジョージ・グレイ卿に歓迎された。グレイにとっては、これらの犠牲によってついにはコーサ族の軍事力は衰え、彼らがいなくなったために手に入れた土地はヨーロッパの植民者で満たすことができた。S. ラザーフォードはジョージ・グレイ卿の伝記の中で次のように述べている。

「キングウィリアムズタウンは、単に1856年に計画されたドイツ軍兵士とそのアイルランド人妻たちの自由になったばかりでなく、ドイツから直接獲得した4,000人の農民にも解放された。グレイは同時にヨーロッパ人やグリグクアス人を山の多い無人の土地へ入植させることにより、バンツ族をけん制しようとした。彼はトランスケイ地方にもヨーロッパ人を定着させることにより、文明化を進めることまで希望した」

これらの戦争についてはほとんどの歴史的な説明は、種々の経済社会的要素がうわべだけ並べたてられただけでなく、我々が想像力を使い始めて、コーサ族の生産様式の崩壊によって、彼らは生活の糧を得るためにかつての支配者に搾取の下に屈服せざるを得なかったことを理解するにはただ想像するほかなかった。彼らにとってはそうすることによって共同体の生活を守る唯一正当な理由となった。

英国人植民者との闘争を通じて、コーサ族は類まれな軍事指導者を生み出した。エンドランベ、ヒントサやマカナのような指導者の下で、コーサ族は英雄的に戦った。英国人侵入者に対するコーサ族の勇敢な戦いは偉大な叙事詩となって百年以上もの間残された。そして抵抗戦争は、洞察力がすぐれ、偏見をすてた歴史家の手によって語られる時を待つことになる。

コーサ族の反抗の長さとおねばりは、彼らの経済がすでに高等水準に達

していたという事実の証拠である。つまり男たちを長期間武力に従事させておくことが出来るほどの経済力を持っていたのである。

ズールー族

18世紀から19世紀にかけての南アフリカの歴史をひもとけば、ズールー族のセンザンガコーナ（Senzangakhona）の子、シャカ（Shaka）王の下でズールー帝国が台頭したことがわかる。シャカ王は、18,19世紀を通して南アフリカ東部のアフリカ人社会を大いに活気づかせた。あの社会的、政治的バイタリティーをもっとも効果的に発揮させた指導者だった。それ故シャカ王の生涯を語ることには大きな意味がある。というのも、同時代人であるナポレオン・ボナパルトの生涯がヨーロッパを変容させたように、規模の相違はあるにしても、どこか似たような形で南アフリカを変容させたからである。あるヨーロッパ人の伝記作家はシャカ王について次のようにのべている。

「ナポレオン、ジュリアス・シーザー、ハンニバル、シャルマニユ……世界史を通してこういう人々が定期的に出現し、人々の頭上高く栄光の軌跡を止めている。恐らくこれらすべての人々の中でも最高に偉大な人として、シャカがいる」

シャカは1787年頃に生まれ、その40年にわたる生涯を通して偉業をなしとげた。シャカはズールーの軍事組織を再編成した。彼は旧来の投げやりに変えて短い突きやりを採用した。戦争や政治的戦略を通して、彼は多くのズールー部族領を統合した。時を移さず、シャカはズールー族の支配を大いに拡大した。ある時期には、シャカは、今のナタル、レソト、スワジランドに当たる全地域を統一しかねない勢いを持ったことさえあった。この大事業は、1828年彼が無念の死を遂げたことで成し遂げられることなく終わった。

このようなわずかの期間に行われたシャカの業績を評価するについて、まず次の疑問に答える必要がある。どのようにして彼は3万人にも及ぶ軍隊の武装を整えておくことが可能であったのか。答はガイアナ人歴史家のウォルター・ロドニー（Walter Rodney）が与えてくれる。彼はシ

シャカの支配はアマズル族 (Amazulu) の集団的努力に依存していたという。

「シャカは、よりすぐれた投げヤリを作らせることができた。というのはアマゴニ (AmaNgoni) は永年鉄を用いており、いくつかの部族の内部には熟練した鍛冶屋が育っていた。これがその社会全体の機能及び農作業や能力を高め、その結果3万人の軍隊を維持し、鉄器で武装させ、牛皮製の全身大のズールーの鎧を一人一人に支給することが可能となった」

1879年になってもなおイサンドルワマ (Isandlwama) の闘いにおいてイギリスの植民地史上最大の屈辱ともいえる敗北を与えることができたのは、すでに規模も勢力も小さくなったズールー軍であった。エンゲルス (Engels) はズールー族の戦闘能力を賞讃して次のようにいう。

「数年前に、(ズールー族は) どのヨーロッパの軍隊にもできなかったことをやり遂げた。ただあるのはヤリだけで火器はなしという装備ながら、密集隊型では世界最鋭といわれる英軍歩兵隊の元込め銃から打ち出す雨あられと降るタマをものともせず、彼らは銃剣の並ぶ英軍の真っただ中へ突っ込み、一度ならず戦列をかき乱し、戦列を破ったことさえあった。彼等の兵器の質には天地の差があり、軍役がないだけに軍事教練などというものの認識はまったくないというのに」

ズールーに対する英軍の敗北は、英議会において抗議の渦をまき起こした。内閣が次の決定を下した。「英国の威信を回復し、ズールー族を滅すべきこと。」この決定を実施するため、何年にもわたってはげしい戦闘がくり返され、何万もの勇敢な男たちの血が流された。

1879年の戦争でズールー族が敗れた結果、ズールーの王、セシュワヨ (Cetshwayo) に課された条件は、1899～1902年のボーア戦争の後にベレーニギング (Vereeniging) 条約でボーア人に押しつけられた条件と、対象的である(後記)。中でも、ズールー王、セシュワヨは、以下を受け入

れるよう強制された。

「私は今度わが領土内にズールーの軍事組織の存在ないしいかなる軍事制度の存在をも許さず、以下を布告し、以後これを定めとする。すなわちすべての男子は軍事制度なるものがチャカ（Chaka）によってつくられる前から存在していたわが民族の善良で古い慣習にしたがってその選ぶところの者と結ばれることが許される。またわが領土に住むすべての男が平和的目的をもって自由に稼動し、自らの意志あるいは雇庸の都合とにかかわらずナタル州、トランスバール州などいずれの土地で働くことをも許される」

これは全面降伏である。それは、アフリカ人の搾取の源を知る上で非常に重要である。人々が経済的、軍事的、政治的力をもつ限りにおいて、彼らはそれを用いて自己を守ることができ、自己の思想と文化と存在感を明らかにすることができる。

この征服の重大性と、アフリカ人にとっての悲惨さは、彼らが権力を失ったということである。それこそが人間社会における究極の決定要因であり、いずれもの集団内及び集団間の関係の基礎をなすものである。その権力を英国人植民者たちに全面的に譲りわたすよう強制されたことを知った時、アフリカ人たちは極度の喪失感を味わされた。セシュワヨに押しつけられた条約が非常に重要だというのはこの点である。ズールー族は、自分たちの統一を守る唯一の手段を放棄させられたのである。ズールー人たちが「平和的目的をもって自由に往来」することができるとはよくいったものであるが、これぞ征服者の側の高慢ちきというものである。

アフリカ人部落や王国を征服し、植民地化する闘いにおいてイギリスはアフリカ人たちの生産力に攻撃をしかけた。これは、飢餓によって外国支配に従属させるだけでなく、自らの生計力を失うことにより労働力を提供せざるを得ないようにさせるためであった。

こういう話をここに書きとどめる意図は、イギリスによる残虐さない

しこれに対するアフリカ人の抵抗をくまなく描いて見せることにあるのではなく、19世紀においてフロンティアを内陸へと向けて拡大したのは、英帝国主義の仕業だということを示すことにある。

歴史家マクミランは、この全期間を通じて英国のすべての政党の政治家たちは、宗主権のことは問わないにしてもアフリカに対する英国の事実上の主権について疑いをさしはさむ者はいなかったという。

1854年及び1856年にそれぞれ建設されたオレンジ自由州及びトランスバール州というボーア人の共和国は、それ自身、イギリスによるボーア人に対する遊びであった。共和国の命運は、ヨーロッパとの全交易ルートを握るイギリスの一存にかかっていた。ボーア人が自分たちの共和国建設のための戦いで使った銃や弾薬は、英国の植民地であるケープ州との通商によって得たものだった。

ダイヤと金の発見

イギリスは沿岸沿いにその支配を固めつつある一方で、1850年にボーア共和国に対する主権を放棄した。しかし1866年にキンバリーでダイヤモンドが発見され、1886年に金が発見されて、内陸に対する関心が再びよびさまされた。

すなわちかつては負担と重荷でしかなかった南アフリカは、ダイヤの発見によって突如、ばく大な富の地となった。資本家、昌陰家、企業家が世界中の町からダイヤを目当てに駆けつけた。公式統計によれば、15年そこそこの間に3,200万ドル相当のダイヤが国外へ流された。1880年代までにダイヤの年間輸出は、その価格において10年前の英国の二つの植民地及び共和国からの輸出総額を越していた。

1870年から1900年まで大英帝国は亜大陸全体を手中にしようと、侵略戦争をあおりたてていた。この30年間の間に、南アフリカの政治的フロンティアの線引きが行われ、こうして、このようにしてつくられた多様な集団の間の関係は、やがて南アフリカで「習慣と生活の仕方」とか「対原住民政策」といわれるように日常化していった。簡単にこれらの戦争を跡づけてみよう。

1873年、イギリスはナタル州のレンガリバレレ（Lengalibalele）の下にいるフルビ人（Hlubi）と戦闘した。

1877年、セククナ（Sekhukuna）に率いられたペデ族（Pedi）によって、トランスバール州（当時の南アフリカ共和国）のゲリラ隊が大敗を喫したのにつづいて、英軍は無血でプレトリアに入り、トランスバールを併合した。

1879年、イサンドルワナ（Isandhlwana）の戦いでズールー族に壊滅的

敗北を喫したのち、英国は力づくでズールーランドに入り、和平を強要して、ズールー族の独立をうばった（ズールーランドは1887年、すっかり併合され、1897年にナタルへ譲渡された）。

同じく1879年にケープ植民地はフィンゴランド（Fingoland）、イデュチワ（Idutywa）及びアダム・コク（Adam Kok）の下グリクアランド・イースト（Griqualand East）の独立有色人共和国を併合した。英国の承認をえて、同植民地はナタルの西、ポンドランド（Pondoland）までのすべての残余のアフリカ人地域に拡大された（1894年）。

1884年、ドイツが南西アフリカを併合したことが刺激となって、英国は直ちに南部ボツワナを併合して「英領ベチュアナランド（British Bechuanaland）」とした。1895年には、ホワイトホール（英政府）とケープタウンとの合意によってそれはケープ植民地に統合された。北ベチュアナランド（今のボツアナ）は英保護領とされた。

1890年、植民者ローズの「英国南アフリカ会社」はマショナランド（Mashonaland）に侵入、次いでマタベレランド（Matabeleland）に侵入した。1896年から97年の間に今のジンバブエの人々によって長い抵抗の戦いが続けられた。

同じく1890年に大英帝国とトランスバール共和国は、スワジランドを共同統治下に置いた。

独立アフリカの抵抗の最後の戦線は、1898年、ボーア戦争の一年前まで破られることはなかった。この年、アフリカ人兵の助けをえて南アフリカ共和国はベンダ（Venda）を破った。

ボーア戦争は1899年10月に始まった。初戦で苦戦したのち、英軍は1900年5月にヨハネスブルグを占領した。ボーアの大統領、クルーガー（Kruger）は国外に追われ、トランスバール共和国の併合が宣せられた。しかしボーア側は敗北を認めず、2年にわたってゲリラ活動を行った。1902年5月13日フェリーニヒング条約で講和が成立した。

英ボーア同盟

ファリーニヒング条約8周年目の1910年5月31日、四つの白人入植地——ケープ、ナタル、自由オレンジ州、及びトランスバール——の代表者たちは、南アフリカ連邦建設の日とした。勝者と敗者の融和を象徴するこの運命の日、英人とボーア人は英王室の支配下に入った。それ以来、ボーア人とイギリス人の間には、南アフリカの政治について完全な政治的平等が確立された。1908年12月8日に英外相、バルフォア卿が下院で行った演説は、この新しい英自治領について英国の抱いた抱負を示している。

「われわれが何度もくり返し述べていることは、われわれが期待しているのはオランダ人とイギリス人が同等の特権をもち、世界中にある英国の植民地支配に伴う恩恵は、女王陛下の他の植民地と同様に、トランスバールや自由オレンジ州の住民もその恩恵に浴するという状況である……。南アフリカの英植民地制度が他のどこにおけるものと同じく自由な制度でなければならないという意図を隠したことは一度もない。すべての道理をわきまえた閣僚はこのことを公然と認めている」

副総督、アーサー・ローリー卿によれば、イギリス人がボーア人を負かすのに手を貸したアフリカ人たちは、昔風の主人と召使いの関係が変わることを期待していたとのことである。しかしそのようなことは起こりそうになかった。イギリス人にとって問題はアフリカ人労働者であり、アフリカの土地であり、この国の心臓部に発見されたダイヤモンドであり、金であった。英国のボーア戦争は古典的な「盗賊の内輪もめ」の事例であり、ヘレーニギング条約と南アフリカ連邦というのは、侵入者同士の握手を文字にしたものである。

サイモンズ兄弟(The Simons)はその著「南アフリカの人種と階級 1850—1950」の中で英対ボーア人の戦争の後、

「アフリカ人農夫たちは武器を取り上げられ、戦時中につかまえた家畜を返還させられた。が、英軍部隊及び共和国ゲリラに奪われた家畜を取り戻すことはできなかった。すべてのアフリカ人成人男子には、2ポンドの労働税がかけられ、2人以上の妻をもつ者には2人目以上につき、1人2ポンド課税された。行政府はパス法、労働契約法、禁酒法の手直しをし、各市当局に対してアフリカ人の隔離を許可し、アフリカ人囚人を鉱山会社に雇い入れ、白人女性とアフリカ人、アジア人、有色人との婚外関係を禁じた。アフリカ人の中には、共和国の時代をなつかしむ者がいた。というのもボーア人支配下では、扱いはまだましであったし、給料も悪くはなかったからである」

ボーア人敗北直後に彼らに政治的権力を与え、同時にアフリカ人にはすべての声を封じたという1910年の解決のあからさまな不公平は、その論理と筋書きが今日なおまかり通るという一つの状況をつくり出した。ファリーニヒングの講和会議において、ボーア人がアフリカ人よりもどれほど大きな要求を出したというのであろうか。ボーア人は征服され、植民地支配下に入り、彼等が権利を主張する土地は戦時規則にしたがって併合されてしまった。しかしイギリス人によると彼らは白い「人種」なのであって、その限りにおいて略奪の分け前にあずかるべきなのである。かくして条約によれば、「ボーア共和国市民」は「武器を置き、英国王の権威に今後一切歯向かわない」よう求められた。すべての「戦犯たちは、エドワード7世国王を戴く旨宣誓すれば、釈放されるべきこと」となっていた。降伏した市民は、その自由と財産を奪われない。さらに、「正当なる戦闘行為」についてはいかなる処置もとられることはない。学校ではオランダ語を教え、市民による要請があればいつでも、授業中にオランダ語を使う。市民は免許をとればライフル銃をもつことを許される。さらに「文民政府」は早急に軍事政権にとって代られるべきこと、及び自治につながる代表機関がつくられることになっていた。彼等の地

所に対しては、特別戦時税は課されなかった。「家や農場の建て直し、食糧、種子、家畜や農具への補助のために、英国王政府は人々に」300万ポンド御下賜たまわる。加えて「『原住民』に市民権を与えるかどうかの問題は、自治を与える日まで、決定を延期する。」

ファリーニヒング条約はこうして、ボーア人には彼等の自尊心をもち続けることを許し、英・ボーア人階級同盟再建の基礎としたのであった。そしてそうすることによってアフリカ人に対する白人支配の絶対性の基礎を築いたのである。1919年にかけて英軍を相手に戦ったボーア人將軍の一人であるボタは、時あたかももう一つの重要な戦争の解決がはかられているベルサイユ平和会議の会場を訪れて、ファリーニヒング条約に敬意を表した。ボーア人たちは、戦いで守るべきもの（独立、国旗、国）をすべて失ったとはいえ、征服者たちは、「彼らの」国を救い、「彼らの」人民を救ったと、ボタは述べた。

「イギリス人たちが我々に示したのは、寛大な和平であった。それが今日われわれすべての者を一つにしている大義のために、彼らと手をつないでいる理由である。申し上げたいのだが、この和平の中には、復讐という要素は全くなかったことを思い出していただきたい。われわれは再建のため助けられ、平等な立場におかれたのである」

その性格上、基本的に人種差別的であったとはいえ、ファリーニヒング条約は何よりもまず南アフリカの鉱山に投資をしていた英国金融資本の利益にもとづいていた。イギリス人たちは金鉱を獲得する目的で入植した。そして一方的な解決を手に入れたボーア人たちは、不承々々ながらも土地とアフリカ人の労働という形の代償を受けるとはいえ、英帝国主義の召使いとなった。すでにみたようにそれ以前でさえも、イギリス人たちはつねに対ボーア戦争においてアフリカ人を同盟軍として用いることを控えていたし、また銃がアフリカ人の手に渡らないように気をつけていた。

リベラリストの間では、ファリーニヒングでの白人であるアフリカー

ナに対する英国の行動は善意の表れとしてみるとともに、黒人であるアフリカ人の裏切りは、そのようなアフリカーナに対する寛大さが故に支払わねばならなかった予期せぬ代価であるとみるのが普通である。英国が直面した倫理の問題というのは、その帝国主義的野望をいかにして達するかにあった。アフリカ人の運命などは全く眼中になかったのである。

英国人と同等の政治的地位にまでボーア人の地位が向上したことで、アフリカ人の裏切りとは、帝国主義の精神にかかわりがある。拝金主義は、この富の権化以外のすべての原理を事実上無意味にしてしまった。19世紀最後の10年間の南アフリカにおけるほど、物欲の故に残忍性と暴力性がむき出しにされたことは後にも先にもなかった。

南アフリカにおける英国の支配は以後、歴史的発展の新段階に入る。その略奪の露払いのために、征服者たちは自分たちが押しつける法的手段を用いて、力づくでとった血ぬられた財産に一種の社会的なみそぎを行ったのである。こうして最後の征服を終えて英国は、征服者たちの間に土地を分け与え、アフリカの人々を支配と搾取のための道具とすることによって、南アフリカ資本主義国家をつくり上げた。

1910年のこの新たな英自治領の創造によって、それまでの征服の時代は、今日に続く長いドラマの第一幕となったのである。マクミランによれば、あの大「カフィール」戦争の年月は、この意味からして決定的であった。「21世紀の大半にわたってバンツー族が被ったほとんど完全ともいえる人権無視は、そのような嵐につづく自然の反応であった。」

19世紀後半以来南アフリカに発達した資本主義的な制度、構造、及び人種差別的な心理は征服の結果生じた社会下部構造とアフリカ人が服従させられた植民地の地位に大いに影響した。スマッツ将軍（Smutz）は、彼が好んでいう「原住民の問題」を論じたが、今日の南アフリカの状況を弁解する人たちからするとその単刀直入さは余りにも血なまぐさすぎると評するほど赤裸々なものである。スマッツは南アフリカの白人入植

者の政策は次のようなものであるという。

「われわれ二つの人種(黒人と白人)がいつまでも手をたずさえて生きつづけることは出来ない。いつか何かが爆発する日がくる。この報いの日のために、われわれ白人は備えなければならない。われわれが、戦略的、軍事的優位を確保することができるすべての物をわれわれの力で押さえていることを知らなければならない。非ヨーロッパ人が火器をもったり、その使用法の訓練を受けるのを禁止しなければならない。製造業、富、及び教育は、白人の手中に収めておかねばならない。これらすべてが軍事力になる。バンツ族の労働組合や政治団体の結成には同意するわけにはいかない。というのもそれは危険な団結につながるからである。感情的な恐怖心と、軍事的必要条件とを混同してはならない」

南アフリカにおいて資本家が発展するための真の要諦は常に勝者と敗者の関係をいかにうまく保つかであった。安くて御しやすい労働力を創出する必要性から、人種差別主義は白人支配者の側にとって、政治的及び経済的行動を通して社会を維持する際の一大決意となり、そうすることによって恒久的な安い労働力を確保しておく経済政策が確立する。アフリカ人を服従させることは征服という災厄を恒久化させることに等しかった。アフリカ人たちは今日搾取されており、その搾取は人種差別法の全体を通して、そして、そのもっとも凶暴な形態を通して普遍的に拡散されている。服従は経済的、政治的、軍事的、社会的目標に役立っている。

外国人が征服によって併合された時、政治的民主主義は終わりを告げる。もちろん、征服の犠牲者を服従させることは、ただやみくもに武力行使が続けられないのと同様、いつまでも続けることはできない。そこにはきちんとした哲学がなければならない。

ヨーロッパによる植民地化は、帝国主義の最盛期には「文明化の伝道使節」とよばれ、脱植民地化の時代には同じことがアパルトヘイト、

「分離発展」ないし「複合民主主義」とよばれる。

南アフリカ征服の遺産と結果は次のようにいうことができる。すなわち、その主な社会学的遺産は白人を支配覇権階級としての立場を確固たるものにしたことである。国の領土と政治的主権とを守ろうとする厳しい戦いの末、アフリカ人もボーア人も敗れ、前者は従属的民族階級になり下られ、後者は征服者たちの弟分となった。イギリス人たちは強奪した権力をもって、圧倒的な新社会経済制度として資本主義を築いた。この資本主義がアフリカ人たちを底辺労働者に落としめ、変転する社会の政治、経済的過程になんらの影響力をももたぬものと化した。アフリカーナの民族主義に悩まされることはないが、アフリカ人の数とその抵抗力とに恐怖心を抱いたイギリス人たちは、経済力を握ることで満足し、政治的権力はアフリカーナーの手に残した。

英対ボーアの戦争後、英国にとってアフリカーナ社会の上層部をばっ興しつつある鉱山業の利益にゆるやかな提携関係につなぐ必要が生じた。この提携をつくることについて、英国は、新しい連邦が英投資家にとって安全である限りには、アフリカーナの恐怖心と政治的偏見とを尊重することに同意した。このやり方は、失敗に終わった1848年のドイツの革命の中で、マルクスとエンゲルスが記述したものに非常に類似している。すなわち商人階級及び産業階級は自分たちで支配するには力不足だと考えて、地主貴族の足元に身をなげかけ、支配権と引き換えに、金儲けの権利を手にした。

戦争と征服は、階級の形成過程に影響を与える。この過程で人種、技能不足及び政治権力の欠除が特徴であるプロレタリアートが生まれた。イギリスによるアフリカ人の政治的奴隷状態を定めた憲法をもつ連邦の成立によって生まれた状況の下に、南アフリカでみられるアフリカーナーによる人種差別的民族主義が可能となった。アフリカ人の征服とその公民権を奪うことにおいて、どん欲な所有者階級の利益力学追及が働いたのである。

「1910年、英国の政策立案者たちは南アフリカにおいてついに彼等の所期の目標を達成した。南アフリカ法は、英自治領に住む白人が占拠した土地を一つの政府の下に統一した。この政府は二つの白人社会を代表していると主張することができ、またそれは、英・アフリカーナの融和政策と、大英帝国の他の構成員たちとの協力に誠心誠意励んでいる男たちが率いていた。H・H・アスキス（H. H. Asquith）とグレーム卿（Lord Greme）は、ジョージ・グレイ卿（Sir George Grey）に溯る先任者たちの目にはとまらなかった創造的撤退を敢行した。……グレームは上院で内閣が満足している旨表明した。南アフリカの統一によって英自治領はその最終形態に落ち着くことになりそうだと彼はいった。『偉大なるアメリカ人グループがおり、偉大なるアフリカ人グループがいる。考えるに、今後何らかの手直しや変更があるにしてもこれら三つの偉大なる分化はここにいるわれわれのすべての者の寿命より長く、今後も長く大英帝国本土外の三大自治領を形成しつづけるでしょう。』

他方、下院で南アフリカ法について最後の演説をした時にアスキスも知っていたとおり……その対南アフリカ政策の第一目標を達するについて英国は、第二の目標を犠牲にした。この目標は1842年に植民地長官、スタブリー卿（Lord Stabely）が定めたものである。その時彼はジョージ・ナピエー卿（Sir George Napier）に指示して、『ナタルの併合については……法の観点からして皮膚の色、出身、人種、あるいは信条によっていかなる区別もあってはならない……ことが絶対的に肝要だ。しかしながら法による保護は、名実ともにすべての者に同じく平等に与えられるものとする』とのべた。英帝国の権力の掌握に関する最終的な評価は、それを放棄した後でどういう社会が残されるかによって定まる。南〔アフリカ〕から手をひくについて大英帝国は、白人少

数者が支配するカースト制もどきの社会を残した。統一と融和の代価は、白人優位の制度化であった」

資本主義の政治的経済は、征服後に確立された真の社会的、政治的な活動を資本家階級の手に集中させる。つまり、搾取の連動方式が出来上がったのである。資本によるアフリカ人の事実上の搾取も、白人入植者全体による社会的水準での差別もある。アフリカ人社会の真の変革作業は英国人征服者たちの手で進められた。そして征服の真の目的は、アフリカ人社会を帝国主義体制の中の農業と金鉱業の一端を担うものとして世界の資本主義制度にくみ入れることであった。

南アフリカでは人種差別主義は当時、植民地征服の偶発的な一部としてではなく、実質的な部分として現れた。それは植民地資本家制度の最高の形態であり、また征服者のイデオロギーのもっとも重要な特徴の一つである。それは植民地生活の必須条件である征服者と被征服者の間の基本的差別であるばかりか、植民地生活の不変性の基盤ともなったのである。

19世紀のイギリスの軍事活動についてこのように長々と述べたのは、大多数の白人のリベラルな歴史家たちが、南アフリカで英国人が果たした役割を牧歌的に描く傾向があるからである。アフリカ人とボーア人との間の中立的な仲裁者としての役割上、英国が戦った多くの戦争は不可避だったというわけである。

英国人の活動を説明するには、つねにその帝国主義的野望を勘定に入ればいけない。アフリカ人集落や王国の征服とそれへの服従にしても、アフリカーナたちの南アフリカの内陸部での放浪にしても、英帝国主義の強制力を分析することなしに理解できない。改革者や人道主義者たちの善意で帝国主義の絶対的な力を押し止めることはできない。というのもその非情な論理は、「文明開化」伝道使節によって決定されるのではなくて、原料を求め、その資源の搾取のための安い労働力をえるという絶対的要請によって決定されるからである。

アフリカ人の抵抗

南アフリカでは、征服及びその後の影響に対する黒人の抵抗は長い歴史をもっている。それは世界の植民地征服の歴史の中のいかなる抵抗にも対応する。たとえばサン族が不屈の精神をもって白人入植者からその土地を守ろうとし、たことについて南アフリカの経済学者、カッツェン（Katzen）は次のように書いている。

「18世紀を通して東北部では、侵入者たちとサン族との間の断え間ない戦闘状態が、吹き荒れていた。移動牧畜部族とサンの狩師間の戦闘はますます残忍さを加え、それによって東北部への一層の侵入は止められた。1715年以後は移動牧畜部族はさらに進んで『ブッシュマンの国』へ入った。1770年までに戦闘は激しさを増し、移動牧畜部族のゲリラは、組織的にサン族の皆殺しをはかった。

他方サン族の攻撃は1780年代に移動牧畜部族そしてニウウェルド（Nieuwveld）地区とスネーウベルグ（Sneeuberg）地区の農場を放棄させ、タルカ（Tarka）地区の移動牧畜部族の占領を危険におとし入れた」

さらに内陸部へ向かう入植者の襲撃隊とコーサ族との間の戦いは、18、19世紀を通じて吹き荒れた。バンツ語族であるコーサ（Xhosa）、グニ（Nguni）及びソト（Sotho）の各部族は、畜産と農業に基礎をおき、相当進んだ政治経済をもって、非常に効率的な軍事構造、組織を発達させていた。そういうわけでコーサ族、ズールー族、ソト族の抵抗は長く続いた。19世紀を通じて彼等の抵抗は英雄的で19世紀後半に南アフリカを訪れた英の閣僚、ブライス卿（Lord Bryce）もそれを不承不承認めざるをえないほどであった。

ブライスによれば、

「ヨーロッパ各国政府が他の新しい国で直面せねばならなかった状況に比べて南アフリカでは白人入植者とこの地の原住民との間

の人種紛争はずっと深刻であった。北米インディアンたちは雄々しく戦ったが、白人の前進にはほとんど妨げとはならなかった。ペルーや中米原住民の反乱は、た易く鎮圧された。かつては好戦的なニュージーランドのマオリ族は、25年間の巧みな戦術の結果おとなしくなり、かなり満足するに至っている。希望峰の原住民とオランダ人及びイギリス人との間の戦いの長さに比べれば、アルジェリアのフランス人对ムーア人、カビル人との間の戦いでさえ短かかったといわねばならない。南岸沿いのカフィール人は、数においてはるかに白人を凌ぎ、勇気に満ちあふれ、荒々しく、木々の密生した国を守った。……原住民間の戦いは終幕となっているようだ。……しかしながら、これらの戦争は南アフリカの進歩を妨げその悪名を高めた。1810年から1870年の間に、イギリス農場主たちがそこへ入りこむのを遅らせた。彼らは本国政府を大いに悩ませ、止めどない軍事費流出の一方で、わずかの利益しか期待できない限り、本植民地はほとんど価値のない所有物だと思わせるに至らしめた」

征服の後、白人入植者たちは、打ち負かされたアフリカ人社会と対決し、彼らを無力化させることを目的としてこの国における政治的権力、経済的権力を固めにとりかかった。白人入植者たちは、力関係についてゼロ概念を信奉した。すなわち、白人入植者の手に権力を集中し、アフリカ人を全くの無力状態にすることである。アフリカ人民族主義が勢いを得たとき、それは黒人对白人の権力方程式の歴史全体を投影している。対決激化の過程で、武力の果たす役割はますます明白になってきた。

アフリカ人の抵抗の高まりは、四つの段階に区別される。第一段階は、侵略に対する武力抵抗で200年以上つづいた。武力抵抗の期間中、英雄が輩出し、今日に至るまで人々の間で誇りをもって語りつがれている。20世紀に入るとともに、第二段階が始まった。すなわち、戦闘が政治的形態を帯びた時期である。アフリカ人はもはや征服されている。彼

らの土地は収奪され、入植者たちは彼ら自身の国を築いてこの国で新たな支配者となり、政治権力を握った。その国を築くについて彼らは、新国家に対するアフリカ人たちの要求をすべて押さえつけ、排除した。アフリカ人民族主義の古典的研究の中でエドワード・ルークス（Edward Roux）は武力抵抗から政治闘争への変化を次のようにのべている。

「1906年のナタル州でのバンバタ（Bambata）の反乱は、南アフリカの黒人の歴史の中で二つの時期の転換期ととらえることができる。部族間抗争、及び白人侵入者たちとの戦いの初期は国を失い、バンツールを国内プロレタリアートの状態におとしめることになった。第二期は、黒人と白人が複雑な経済的政治的関係において交じり合っているという南アフリカの今日の状況の枠組みの内部で、民族解放及び民主的権利を求める戦いの時期である。バンツール族は、第一期には孤立した部族として、軍事戦線において戦った。彼らは白人たちと同一の条件で出くわすことがなく、ライフル銃及び機関銃に対して循とやりで立ち向かったのであるが、ついには彼ら自身の領土と軍事組織をもつ、独立部族または民族のメンバーとして、互いにまみえた……」

第二段階では、民族的抑圧のみならず、階級的搾取にも対抗するための多様な戦術や戦略の模索、発展を観察することができる。アフリカ人たちは多くの困難に直面した。彼らのかつての支配者たちはおどされ、分裂させられ、そのような状況に少しでも反対を唱えようものなら首になった。このようにして1910年前のアフリカ人の闘争の政治史は必然的に分断され、散発的にならざるをえない。アフリカ人の統合を目指す努力は、支配階級とその手先の策動によって、いつも妨害をうけた。それ故アフリカ人民族主義発達の評価において、それが味方であるにせよ敵であるにせよ、支配者集団のメンバーによる様々な妨害に注目することが重要である。支配者集団のメンバーによる介入は、様々な時代にアフリカ人がとる戦術に重要な意味をもつ。

独立から服従への転換の時期には、請願という形をとった「憲法の範囲内の手段」がとられた。当初、被征服者グループが組織する正式の組織はいずれも、民族闘争及び階級闘争の「動員主体」である以上のものであった。その政治的機能は、組織者たちは抑圧の強まる制度に対する思想上の攻撃としてはもっとも冗漫な形である新しい問題を誘導し、生起させること、即ち教育に関心をもつという点で「間接的」であった。この時期において「政治的行為者は、レーニンのいう前衛党のオルガナイザーないしプロの革命家というより、インテリグループである。」

第三期は第一次大戦中に始まった。その時、多数のアフリカ人が町に出て、十分にその資格のあるプロレタリアートとして鉱山及び第二次産業にくみこまれ始めた。1914年に都市の黒人プロレタリアートは24万3,509人であった。1915年には26万495人、1918年には26万8,412人であった。大戦中及び戦後は、ストライキが主な闘争の武器であった。たとえば1920年の選挙の数週間前、白人鉱山労働者はストに入り、3日後にこのストが終息したのち、3万とも4万ともいわれるアフリカ人鉱山労働者がその先例にならったが、賃上げについては成果にさほど見るべきものがなかった。

第四期は、1960年にアフリカ人民族会議（ANC）及び汎アフリカ人会議（PAC）を禁止した時に始まる。1961年にウムコント・ウェ・シズウェ（UmKhonto We Sizwe）すなわち「民族のヤリ」が、武力闘争遂行を目的として組織された。一連の破壊活動があったのち、1967年に武力闘争が開始された。それは実際、かつての闘争形態への復帰であった。武力闘争の開始は、白人資本家支配が、その成立時と同様に血ぬられた暴力の内に歴史の中に消えてゆくことを意味した。1960年代後半に、世界秩序が変化し、軍事対決が今や可能となったとの客観的認識がアフリカ人の間に生まれた。このことが、征服から1960年までの議会外闘争の段階の理解を可能にする。いうまでもなくその目的は同じことであって、政治的、経済的独立を達成し、アフリカ人と他の被抑圧グループが管理

と搾取の対象物であることを脱して、この国の経営の対等のパートナーとなることになる。闘争の方法は、具体的な歴史的、客観的条件によって決定される。

1910年の南アフリカ連邦の成立以後、何度かアフリカ人民族主義の再覚醒がプロレタリア運動と合体して白人政府の構造を脅かしてきた。

1918—19年の産業通商労働者連盟（ICU）のぼっ興及び、1920年のその戦闘的活動は、白人たちを大いに悩ませた。彼らはICUが黒人大衆労働者及び失業者の群れの意志を力強く代弁することに恐れをなした。

しかしながら、南アフリカで権力闘争が加わったのは、第二次大戦後のことであった。アフリカ人民族会議（ANC）は、南アフリカインド人会議（SAIC），南アフリカ共産党（SACP）及び有色人連盟とともに、1952年の不服従運動が始まると果敢な戦いを開始した。1950年代の終わりまでに、様々な運動は、白人優越の政治構造を破壊寸前にまで追いこんだ。支配者たちは民衆の盛り上りは、押えなければ、彼らの支配がおびやかされるということに気が付き始めた。1960年3月のシャープビルの虐殺は、抑圧され、搾取される人々の支配階級及びそれに代わって行われる国の行為に対する闘争の結果であった。

それ故要するに1949—60年というのは、白人優位国家のあらゆる側面に対する先鋭的な闘争の時期であった。闘争は、不服従運動のように時には意識的に、そして時にはポンドランド（Pondoland）、セククニランド（Sekukuniland）の農民の反乱のように自然発生的であった。それは多様な形態をとり、多様なスローガン、多様な路線の下に発展した。バンツール教育反対運動からジャガイモボイコット運動、「一日一ポンド」運動、パス法反対運動などがある。女性、農民、労働者など、様々なグループや組織が運動に参加した。歴史に前例をみないほどの困難と急激に高まる不満は、革命を求める性急さを生み、事態の進展を速めた。この点を指摘するのは重要である。というのは、それが1976年6月16日のソエトの学生のほう起を正しい文脈の中においたからである。1960年

の ANC と PAC の禁止が真空状態を生み出していたことには疑問の余地がない。1963年、リボニア（Rivonia）における議会同盟総司令部が発見され、捕縛されたことは大きな傷手であった。それによって同盟の地下組織を壊滅させた。1964年から1968年まで、政府は過酷な法を一層過酷に適用し、大いに拷問を用いて国中に沈黙のとばりを降ろしてしまった。

しかし、それは長続きしなかった。ANCは、1963年の打撃から徐々に立ち直った。南アフリカ国内自身でANCは1960年代後半及び1970年代前半の基本的性格は、革命そのものを指向しており、そのような時期にはいつ何時でも革命が起こりえるということを理解した。

黒人意識運動のぼっ興及び南アフリカの様々な都市でのストライキの多発は、国内の不満の高まりと、国外活動及び再建された議会同盟との相互関係を反映していた。

わずかなページで南アフリカの歴史の重要な出来事を拾うのはとても無理である。ここにのべた範囲のことは、南アの歴史及びそれを形成した社会的な力の性質について、正しい見通しを得るためには、より詳細に研究する必要がある領或を例示したにすぎない。

1986年9月5日 初版発行
1987年12月25日 第2刷発行

国際連合広報センター

東京都港区南青山1-1-1
新青山ビル西館22階

〒107 電話 (03) 475-1611~2

